



題字 井口 文章
再刊 第458号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2024

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：この夏、総文で躍動した団体を紹介
剣道部に太鼓が寄贈される
新聞委員会が総文に行ってきました！
新聞委員の岐阜での活動についてご紹介

日々の努力を全国の舞台へ ぎふ総文に3団体が出場

7月31日(水)から8月5日(月)まで行われた第48回全国高等学校総合文化祭ぎふ総文2024に錦城から将棋部、映画研究部、新聞委員会の3団体が出場した。今号では、将棋、新聞部門の大会の様子、出場したメンバーの感想を紹介する。

将棋部

8月1日(木)から8月2日(金)まで岐阜県高山市の飛騨・世界生活文化センターにて、第48回全国高等学校総合文化祭ぎふ総文2024将棋部門が開催された。錦城から将棋部の渡辺千紗さん(3年)が女子個人戦に出場した。個人戦として全国大会に出場したのは初めてだったそうだが、渡辺さんは「いつもと違い、仲間が横にいないという意識したうえで、守備が弱いというのは3年間の私の中で、今大会ではその点を意識して戦えたと思います」と語ってくれた。



3年間の活動の集大成を岐阜の地で発揮する

渡辺さんは「入学したばかりの頃は、将棋で活躍するなど全くもっていませんでした。なので、私に将棋の世界を教えてくださった先輩方、支えてくれた仲間たち、応援してくれた皆様にはとても感謝しています」と将棋部での3年間の活動を振り返り、「これから、後輩の指導に力を入れ、将棋部が発展していくことを願っています」とメッセージを送った。

「本当においしいお茶を知ってほしい」 探究びくず 錦城祭お茶企画着々と準備進む

現3年生の探究活動から始まった「文化祭で小平野菜を売ろう」活動。以前の紙面にて、今年はお茶に加えて卒業生とコラボしたお茶の企画も進んでいると紹介した。その企画の中心となっているお茶は、夏休み中も着々と準備を進めている。



お茶を飲み比べているメンバーたち

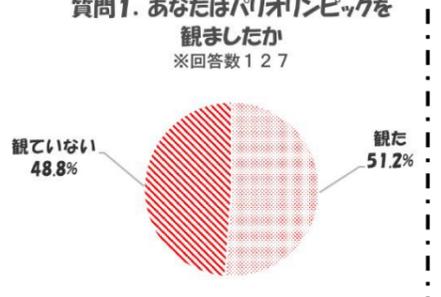
7月23日(火)には、活動に協力して下さる狭山茶池乃谷園の代表取締役であり錦城の卒業生でもある池谷英樹さんに学校に来ていただいて話し合いを行った。狭山茶の特徴や生産状況についての説明を受けた後、最終目標のブレンドへ向けて実際に飲み比べた。同じ煎茶でも品種や加工のしかたによって様々な種類のものがあり、普段はあまり感じない機会のないその違いに驚いた。

終了後、池谷さんとお話を伺うことができた。池谷さんは今回の連携に踏み切ったときの担任の先生であった後藤知子先生に声をかけられたことだと語った。これまでも多くの人が、団体とコラボして様々なことをやってきたという池谷さんだが、高校との連携は初めてだそう。狭山茶の名産地である地元・入間でお茶のPRをしていく中で「学校とも連携が取れるのはうれしいです」と話してくれた。

また池谷さんはお茶離れが進んでいる今の世代において、本当の美味しいお茶を知りたい人が多いと話すと、お茶を飲まない世代に広めていきたいと語った。そして、本当においしいお茶を飲んでほしいという思いを語った。

錦城生のパリオリンピック事情大調査

今年の夏休み中に行われたパリオリンピック。錦城生127名にアンケートを取ったところ、半数の51.2%の生徒がオリンピックを観たことが分かった。印象に残った競技について、スケートボードや男子バレーボール、体操男子団体、柔道を挙げた声が多かった。印象に残った選手としては、大逆転で金メダルに輝いたスケートボード男子の堀米雄斗選手を挙げた声が多かった。その他にも、スケートボード女子吉沢恋選手や、スポーツクライミング男子安樂斗選手など同年代の選手たちの活躍に勇気を与えたという意見も多く見られた。パリオリンピックについてセーヌ川の水質問題や誤審騒動など大会を通じて浮き彫りとなった問題が印象的だったという錦城生が多かった一方で、日本選手達の頑張りに感動したとする声も多く聞かれた。あなたはどの競技が一番印象に残りましたか？ (蘭)



英語を通じて、視野を広げる5日間 今夏もグローバルスタディーズプログラム開催

8月5日(月)～9日(金)、視聴覚AにてGlobal Studies Programが実施された。パキスタンやナミビア、ネパールなどの多種多様な国から来た5人の留学生と1人のファシリテーター、30人ほどの錦城生が参加した。5つのグループに分かれて英語でディスカッションやプレゼンテーションに取り組んだ。事前に配られたテキストに沿った1日5時間の授業が5日間行われ、その授業はすべて英語で展開される。お互いを知るための自己紹介から始まり、アイデンティティやバイアス、自分の強みなど様々なテーマに対してそれぞれのグループでトークを行う。自グループを主に担当する留学生だけでなく他の留学生とも話す機会が多く設けられ、休憩時間にも積極的に会話をしようとする姿が多く見られた。また、日本ならではの言葉について生徒が留学生に説明をするといった内容のものもあり、普段の学校での授業よりもより能動的な姿勢で取り組むことが求められるプログラムでもあった。実際にプログラムに参加した小尾瑞希さん(2B)は、このプログラムについて「生まれ育った国や地域、環境が全く違う相手とアイデンティティなどについて話すことで、今までとは違った角度から自分や社会について考えることができました」と語ったうえで、「とても有意義な時間になったと思います」と5日間を振り返った。(瑞)



プログラム最終日に笑顔で集合写真

道場に響く太鼓の音 剣道部に太鼓が贈呈される

8月3日(土)に剣道部で太鼓の贈呈式が行われ、剣道部に太鼓が贈呈された。太鼓は剣道部同窓会の方々から寄付によって贈られたものだ。錦城高校には開校当時から剣道部があるが、昭和61年に剣道場が出来たから今までは稽古の始まりや終わりの合図として使われるもので一般的に多くの剣道部が所持しているという。太鼓については錦城高校の開校当時から贈呈式にはOBも駆け付け、OBたちは「長年の悲願であった太鼓を寄贈出来て嬉しい」と語り、この太鼓が長く受け継がれていくことを願ったという。



剣道部の名前が刻まれている太鼓

残念ながら、巻幡先生と高橋先生は昨年と今年にご逝去されておられ、太鼓を見ることはできなかった。島田先生は「間に合わなかったが、太鼓の音が天国まで届いてほしいですね」と穏やかに語った。(風)

むらさき草

夏休み中、家族旅行で岩手県の陸前高田を訪れた。陸前高田は、東日本大震災の津波による甚大な被害を受けた地域だ。街の光景を見て私は衝撃を受けた。視界に入る建物すべてが新しい。この地域の建物は全て津波に飲み込まれてしまし、震災前の建物は残らなかった。テレビやネットからしか被災地の情報を得てこなかった私にとって、その被災を体験できたことは貴重な経験となった。東日本大震災が起きた当時、私は3歳だった。3歳のころとほとんど覚えていないが、この震災だけは違う。東京でも、電柱は上下左右に激しく揺れ、揺れによってブロック塀が崩壊した。『錦城高校新聞』ではちょうど1年前、防災について特集した。私は、小平市役所の防災危機管理課の堀口さんと櫻井さん取材した。高校生に意識してほしいこととしてお二人は災害に関する正常性バイアスを持たないことを挙げていた。今でも印象に残っている▼災害に関する正常性バイアスとは、災害が発生した際に「周りの人は避難していないから自分もしなくて大丈夫」などと楽観的に考えてしまふことだ。その結果、防災意識の低下につながり、いざ地震が起きた時に行動できなくなってしまう▼8月には南海トラフ地震臨時情報が発表されるなど、地震の脅威は迫ってきている。それでも、「東京は南海トラフの被害想定地域から離れているから大丈夫」なんて話している友達がいっぱい▼陸前高田を訪れた経験、新聞委員として防災について取材した経験から正常性バイアスを持たないことの重要性を実感した。災害はいつ、どこで起こるかは分からない。だからこそ、バイアスを持つことなく、日頃から備える意識を持ち、いざ災害が発生したときに迅速に行動できるようにしたい。(蘭)

ぎふ 2024 文 総

総文祭レポート 第1弾!

共同取材で学ぶ真の岐阜

東濃地域の地場産業

Bコースの見学地は織部ヒルズ、道の駅志野・織部、岐阜県現代陶芸美術館でどこも伝統工芸品の美濃焼にちなんでいる。土岐市にある織部ヒルズは焼き物の卸売業者が集まった大規模商業団地である。様々な店舗が点在する中、取材で訪れた店は「Felice (フェリーチェ)」。女性向けのおしゃれな食器を中心としたライフスタイルショップで、魅力的な商品が並んでいた。織部ヒルズ内にある道の駅志野・織部では焼き物やお土産の買い物のほか、レストランやスイーツ専門店も楽しめる。多治見市の岐阜県現代陶芸美術館で展示されているものは全て焼き物で、その土地ゆかりの作家や海外の作家、更に無印良品のような商業会社の製品までも所蔵しているという。芸術としての焼き物と工業製品としての焼き物の両方の違いや繋がりをよく知る機会となった。(英)



SDGs に取り組む地場産業

Kコースは、恵那栗を生産する栗農園のツアーに参加した。中津川市は栗きんとんが特産品として有名であり、恵那栗はこの材料となるそう。ツアーをしてくれた栗農家の榎間信明さんは現在、栗の菓子を取り扱う菓子屋と計画出荷体制をとっているという。互いに二人三脚の体制をとることで、農家不足が深刻化する恵那栗を守っていると語った。

次に訪れた「おかしなトマト」というトマトを生産している農園では中玉サイズのトマトに与える水分を抑えることで、糖度が凝縮された甘いミニトマトサイズのトマトを収穫している。収穫されたトマトは併設されている工場でジュースなどに加工して販売している。その工場では野菜の皮やヘタなどの使われない部分を粉にする機械があり、その粉をお菓子の生地に練りこむなど、食品ロスの削減に貢献しているという。

2つの施設の取材は食品の裏で多くの人が動いていることを感じさせる良い機会となった。(凧)



東濃の岩と歴史

Fコースでは主に中津川市にある中津川市鉱物博物館と苗木城跡を巡った。この地方は火山活動によって発生したマグマがゆっくりと冷え固まる花崗岩の名産地であり、博物館内では様々な姿かたちをした花崗岩や、地元の鉱物研究所から寄贈された鉱物などが展示されていた。



続いて、国指定史跡の苗木城跡を訪れた。苗木城は約500年前、苗木遠山氏が勾配の早い高森山の頂上に作った城であり、江戸時代の一国一城令により現在は石垣だけが残っている状態となっている。ここでは班ごとに分かれ、ガイドを受けながら頂上を目指した。登っていく中でも少し離れたところから敵襲を伝えられるように開けた場所があったり、上から石を投げて敵が登ってくるのを阻止できるようになっているなど様々な工夫が見られた。そして頂上では展望台があり、そこでは500年前も変わらない木曾川と中津川を一望できる絶景を眺めることができた。(仏)

岩村を堪能する



Cコースが初めに訪れたのは、地元の鉄道である明知鉄道だ。1989(昭和60)年に開業された明知鉄道は恵那市を起点に東濃地方の高原地帯を南下しており、その全長は25.1kmに及ぶ。さて、明知鉄道は第18回日本鉄道大賞(2019)を受賞した。その背景にある『鉄カード』は全国各地のローカル鉄道で発行されるトレーディングカードで、現在80以上の鉄道会社が参加している。『鉄カード』の配布にあたって各会社で入手方法は異なるが、明知鉄道ではカードを売らず、他のグッズ購入が条件など入手へのハードルを下げてお客さんが地元の商品を買ってくれるようにしたという。実際に頂いた極楽駅の鉄カードは、臍脂や緑、金などの高級感ある色合いのデザイン。あなたもこの機会にぜひ、移動や旅行の思い出として鉄カードを集めてみてはいかがだろうか。

続いて紹介するのは岩村城下町。全長約1.3kmの古い町並み周辺には当時の面影を残す商家や旧家、なまこ壁などが今も佇み、平成10年には「重要伝統的建造物群保存地区」として選定された。岩村城下町で外せないのが「映画やドラマのロケ地」としての役割だ。永野芽郁さん主演の岐阜県を舞台とするNHKの朝ドラ「半分青い」、菅田将暉さん主演の映画「銀河鉄道の父」などがこの岩村城下町で撮影された。また、城下町を歩いてみると「電柱がすべて地中に埋まっている」「建物の入り口には、岩村出身の儒学者である佐藤一斎の名言集がQRコード付きで記された看板がある」などネットを調べただけでは気づけないことをたくさん教えてくれた。至る所に工夫が施される城下町。岐阜を訪れた際にはぜひ一度、岩村城下町に立ち寄ってみてほしい。(普)

岐阜県東濃地域

くらしの今昔



Jコースでは『くらしの今昔』をテーマとして、恵那市にある中山道広重美術館と恵那銀の森を訪れた。浮世絵専門の美術館である中山道広重美術館では、職員の方に美術館や浮世絵についてのお話を伺った後、実際に作品を鑑賞したり版画体験を行ったりした。最終的な目標である交流新聞作成に向けて、一般の来館者に取材をしている班もみられた。

私たちが訪れた2つ目の場所は「自然と食の複合施設」と称される恵那銀の森。冷凍おせち料理の食品会社である株式会社銀の森コーポレーションが運営しており、緑あふれる園内に和菓子屋や洋菓子屋、総菜屋といった食べ物の店が立ち並び、実際に植林などの事業に携わる高木一磨さんに企業の説明を受けたり、班ごとに店に取材を行ったりと各々の活動に精力的に取り組んだ。(瑞)

中津川宿の今昔

Lコースは『中津川宿の今昔』をテーマにひとまちテラスや中津川市中山道歴史資料館の取材を行った。

最初に訪れたのはひとまちテラス。ひとまちテラスは、子育て、市民交流、学び、観光の4つの機能を一つに集約した3階建ての複合施設だ。1階には地元の高校生とコラボしたアイス売っているカフェや観光客向けの紹介ブース、2階には図書館、3階には子育て支援センターが設置されており、市民から観光客まで幅広い層の人々が交流できる施設となっていた。

次に訪れたのは中津川市中山道資料館。江戸時代、中津川は馬籠宿、落合宿、中津川宿の3宿が置かれ、中山道の中心として栄えた歴史がある。中山道資料館では中山道に関する文献や資料を自由に閲覧することができ、中山道の繁栄の歴史について知ることができた。

2か所の見学を通じて、今と昔で形を変えながらも東濃の中心として繁栄し続けている中津川の姿を実感をもって知ることができた。(蘭)

